

# 構造医学ニュース

(1995年8月～11月)



## 機能水の殺菌作用は電気エネルギー 構医研・住岡医博が機能水シンポで発表

(財)機能水研究振興財団(浦田純一理事長)主催(厚生省後援)による第2回機能水シンポジウムが、11月3日・4日の2日間、京都市中京区の京都リサーチパークで開催され、日本構造医学研究所の吉田勸持博士(医学、理学)、住岡輝明博士(医学)、徐海濤博士(工学)の3氏が「電離性酸化水(機能水)における殺菌機序の考察」と題して研究成果を発表。3氏を代表して住岡氏が演壇に立った。

住岡氏らの研究は、機能水の殺菌作用は電荷を帯びた水分子クラスターが微生物と衝突して微生物に許容量以上の電荷を与えることにより破壊・殺菌するということを実験的に証明しようというもので、発表では機能水の滴下および通電によって、4,500倍に拡大された黄色ブドウ球菌、大腸菌、緑膿菌が瞬時に破壊される様子を見事に収めたビデオを放映しながら住岡氏



機能水シンポで発表される機能水の研究成果



第2回機能水シンポジウムのエントランス

が実験経過を説明し、機能水の殺菌作用は一般的に言われているような塩素などによる化学的なものではなく、電荷作用によるものであると結論づけた。

米国では電氣的な殺菌能力は塩素の300倍も高いという研究報告が出されたり、日本でも従来から薬害が指摘されていた塩素が数年のうちに禁止されるのではないかとという観測もあり、シンポジウム参加者に少なからずショックを与えたようだ。そのためか、住岡氏の発表後質問が続出し、座長が議論の整理に四苦八苦する場面も見られた。また、共同主任研究者として吉田先生が、電荷による細胞の破壊メカニズムの原理をイメージ模式図を使いながらわかりやすく解説し、住岡氏の持ち時間をかなりオーバーする補足説明を行なった。

同シンポジウムは、21世紀には40兆円産業に成長するといわれる酸化還元水やアルカリイオン水、環境還元水などの機能水の研究と産業の振興を図るため、昨年から開催されているもので、今回の京都大会では機能水の医学的効果や物性についての研究報告など50件が、国立予防衛生研究所をはじめ全国の病院、研究機関、関

# 構造医学ニュース

連企業から発表された。参加者は約1,500人。  
なお、第3回大会は来年、福岡で開催されることになっている。



## 吉田先生が「機能水を語る会」で特別講演

住岡医博の発表（2日目）に先立って、機能水シンポジウムの1日目の11月3日、今回の実験で機能水製造機を提供したりモデリング21社（中林生貴社長）が、京都ホテルで「機能水を語る会」を開催。吉田先生が機能水の殺菌メカニズムの基本原則について約40分間にわたって講演した。

吉田先生は、機能水中ではマイナスに帯電した細菌にプラスの電荷を持った水分子クラスターがくっつき、細菌の静電容量を超える電気エネルギーが負荷されることによって、細菌が瞬間的に爆裂破壊されること、また、このような破壊が起きるのは生物コンデンサーの機能を有しているもの、つまり境界膜をもつものに限られることなどを模式図を使って説明した（研究内容の詳細は本誌別項に掲載）。



「機能水を語る」で講演する吉田勸持先生

なお、「機能水を語る会」には官民医療関係者など約200人が出席。浦田純一（機能水研究振興財団理事長）、川名林治（岩手医大名誉教授）、重松峻夫（福岡大医学部教授）、岩崎輝雄（日本健康開発財団常務理事）、八巻良和（東大農学部助教授）、清水義信（東北大歯学部助教授）の各氏があいさつに立った。



## 構造医学研究所が15周年記念祝賀会を開催

日本構造医学研究所は8月26日、熊本市のニュースカイホテルで、設立15周年記念研究会および祝賀会を開催した。主催は同研究所から巣立ち独立していった人たちがつくる構造医学同門会。出席者は同門会関係、研究所関係、協会関係者のほか、東京地区の合宿セミナー修了者など約200人。

祝賀会に先立って行われた講演会では、吉田先生が2千年に及ぶ思想史の流れをわかりやすく概説し、構造医学の基本的意味を思想的観点から説いた。構造医学の「構造」は狭義の構造主義とは本質的に違い、自然界にあるものが相似的につながる関係にあることから出てきた考え方で、いわば、生命関係主義であるとしている。

講演会の後、認定証の授与式が行われ、構造医学の研究に日頃から尽力した人たちに、基礎研究課程修了の認定証と記念バッジが贈られた。

引きつづき祝賀会では、まず吉田先生があいさつに立ち、15年を振り返って、構造医学が医療に限らず、さまざまな分野に波紋を投げか